

令和7年度小学校教科担任制実施報告書(高学年型)

学校名
海田町立海田西小学校

1 学校の概要

(1) 学校の学級数

	通常学級							特別支援学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
学級数	2	1	1	2	1	1	8	2	10

2 加配教員が専科指導を行う教科及び週当たりの担当授業時数

(1) 第5、6学年の指定教科

指導教科名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
算数	6	1	5	5	
算数	5	1	5	5	
体育	6	1	2.6	2.6	
体育	5	1	2.6	2.6	
理科	5	1	3	3	

授業時数 計 18.2 (a)

(2) その他

指導教科等名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
体育	3	1	3	3	

授業時数 計 3 (b)

授業時数 合計 21.2 (a)+(b)

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	2	1	2	1
6年1組 (担任: A)	A	A	A	推進	A	専科	A	A	推進	専科	A	A	A
週当たり標準授業時数	5		2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	2	1	2	1
5年1組 (担任: B)	B	B	B	推進	推進	専科	B	B	推進	専科	B	B	B
週当たり標準授業時数	7		2	5	2.6	1.7	1.7	3	1	1	2	1	
3年1組 (担任: C)	C	専科	C	C	C	専科	C	推進	C	C	C	C	

4 高学年担任が指導を行う教科等及び週当たり授業時数

学年・学級	児童数(人)	担任	担任する学級以外の授業時数(週当たり)				担任する学級の授業時数(d)	授業時数の合計(c)+(d)
			指導学年・学級	教科等名	時数	時数計(c)		
6年1組	29	A				0	18	
5年1組	33	B				0	15	

## 5 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

〈効果のあった取組〉	
①	算数科・理科での宿題の添削や朝学習・昼学習への専科の入り込みや実態に合わせた復習を行う等、児童の学力向上に向けて取り組むことができた。
② ③ ④	電子掲示板を使って間接的に認められる場を設けたり、授業や行事などでの頑張りを担任外の教員も直接声をかけて褒めたりした。
① ③	学級担任以外の教員が指導することで、教科によって指導者が違うことに慣れ、中学校の教科担任制へのスムーズな移行が期待できる。
④	備品点検やアンケートの集計、受験対応などを中心になって行い、チームとして仕事を進めた。
①	1学期に実施した新体カテストの校内課題種目につながる運動を、全学年で体育科の準備運動として行い、再測定を行った。



〈成果〉	
①	算数科では、学期末テストの期待平均値以上の児童の割合が、5年生は82.4%から87.5%、6年生は75%から77.8%と向上した。5年生理科は94.1%から97.0%と向上した。
② ③ ④	児童アンケートで、自分にはよいところがあると思う児童の割合が、5年生82.3%から94.2%、6年85.7%から87.4%と高まった。
① ③	高学年児童にとって、担任外の教員が指導することで、教科によって指導者が違うことに慣れるとともに、児童アンケートで「教科担任制で学ぶことで、相談できる先生が増えた。」と思う児童が86.7%と多くいた。
④	高学年担任の業務を分担することで、繁忙期の業務を分散することができた。
①	校内課題種目について、再測定を行うと、前年度の記録を上回った割合が、29.2%から83.3%と向上した。

〈課題〉	
①	言葉で書いて説明する力を十分定着させできていない。
①	考えを交流する際に、互いに意見・質問をするような活動にさせできていない。
②	自己肯定感が低い児童が固定化されており、個別の対応が必要。
④	急な補欠授業対応等で、予定していた準備ができなくなることがしばしばあった。



〈対策〉	
①	自分の考えを書いて表現する機会を設け、添削を繰り返す。
①	教師がファシリテーターとなって児童同士の思考をつなぐとともに、児童同士が互いの意見の感想や質問をする機会を意図的に設ける。
②	調査をもとに対象児童を明確にして、日々成長点を探し、適宜褒めたり認めたりする。
④	早めに準備を行い、急用が入る余白をもった働き方をする。